

## 【Zigzag-memo No19】 私の老計・死計（１）

還暦を過ぎ、後期高齢者に入った私は「人間デブリ」——デブリとはあの東京電力福島原子力発電所爆発事故で生じた放射能まみれのあらゆる瓦礫が固まった残骸様相のもの——を抱えて動けなくなった人間にはなりたくない、全身が「人間デブリ」漬けになった人間にはなりたくない！

私が敬慕・私淑する安岡正篤先生<sup>まさひろ</sup>は人生の五計（生計・身計・家計・老計・死計）について解説されている。その中の私に係る老計・死計の段である。

最近 2024(R6)年 8 月に、うれしい話を聞いた。

- \* 1；ある方の父親が病に伏せ絶命の 1 日前、まもなく臨終の時、息子に対して“あそこにあるあの本を持って来てくれ！”と言うので持って行った。息子は内心、今あの世に逝く時になって本を読めるのか、理解できるのか何の役にも立たないだろうと思ったそうだが、最後の自分を奮い立たせるが如くに。一所懸命、本にかじりついていと話された。
- \* 2；私の親族（介護度 4）のこと、デイサービスに行くと軽運動や音楽や幾何パズルのコーナーがあるが、俺はほとんど幾何パズルコーナーで過ごす、男のほとんどが集まると話された。

以前のことだが、

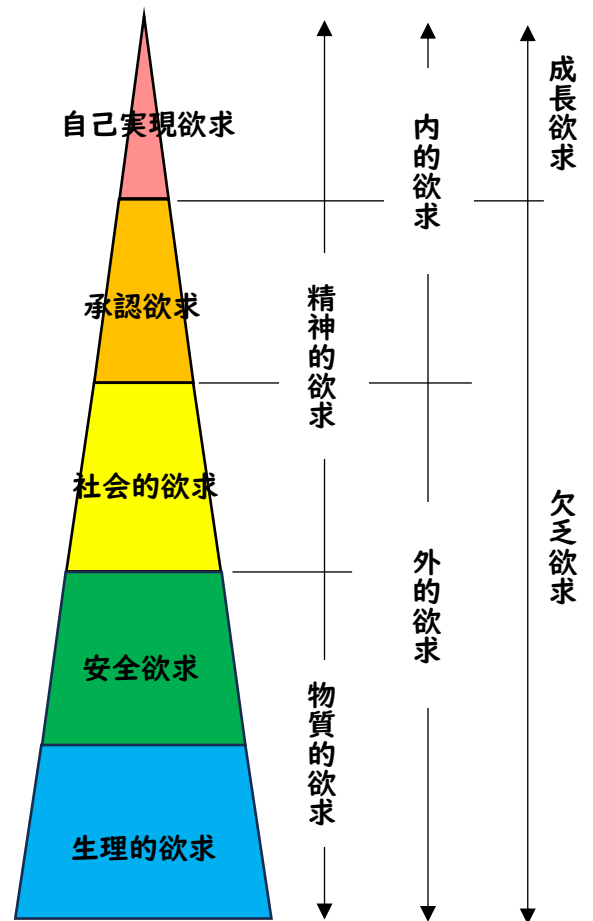
- \* 1；私の叔母（亡き父の姉）が病に伏せているさ中、絶命の 1 週間前に、“あの本、読むの忘れていた”と、本 3 冊を持って来てくれと言われて持って行った。起きている間はその本を読み続けて、満足な顔で逝ったそうだ。

この 3 例共、みなさん、死ぬまで向上心を持ち続けていたという証左、いい話である。

この話からいろんなことが浮かんで来る。

一つ目；図(表)－1「<https://studyhacker.net/>を参考」のとりの「マズローの欲求 5 段階説」を取り上げる。みなさんご存じだろうから一つずつの説明は省略する。

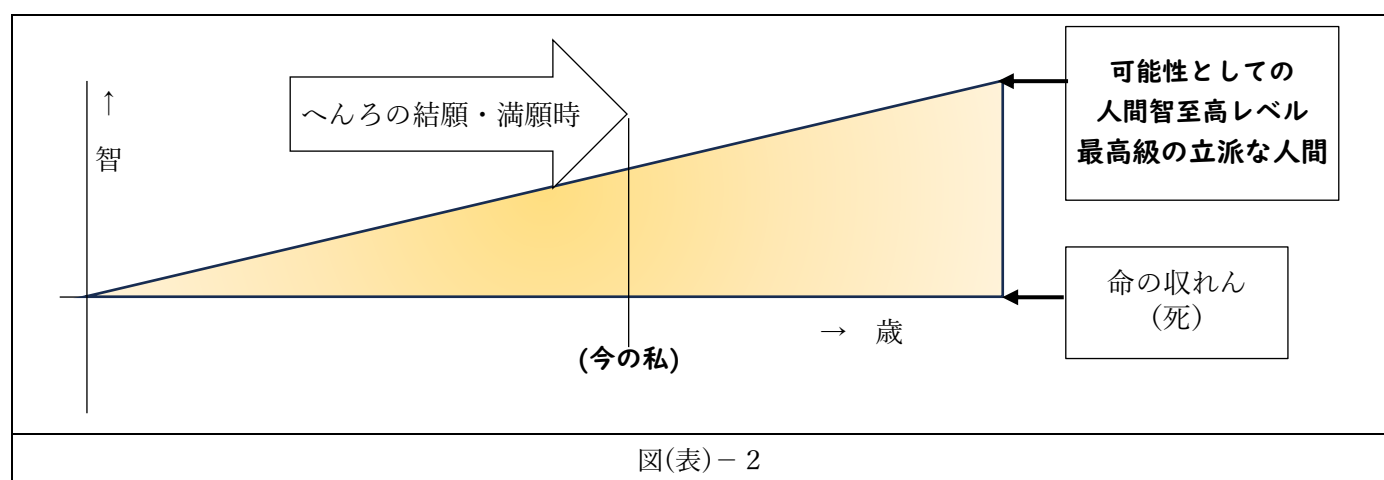
自分のこれまでの人生や思考性を振り返ると、ぴったり当て嵌まる思いがする。最高レベルの自己実現欲求は、すなわち「満足できる自分、納得できる自分、すっだいいことができる自分になりたい」と願う欲求だろう。あるいは、「100%満足した自分、100%納得した自分、100%すっだいいことをやり切った自分」に到達したいという向上心の本能だと思う。もちろん、その具体的なものはこの五感で掴める訳はない。あえて抽象的に言えば至高の境地ということだと思う。



図(表)－1

二つ目；私の歴史街道・歴史古道や四国へんろ遊学紀行に

おいて、いつもの場合も、目標地点にゴールした、巡礼を終えて結願・満願を果たした時の心境を振り返ると、「あら、おわっちゃった！」と。何か大事業を成功させたなどという格別の高揚感は無かった、欣喜雀躍することもなく格別の感動・感激は湧かなかった、淡泊な空気間で終わったのだ。実は、私のみならず同様のことは本を書いた人達も含めて、多くの人が言っている。なぜなのか……。人間の本能に根差す良い意味での向上心——理想精神の追求という『欲望』にあるのだろう、これがマズロー説によれば自己実現欲求の満足到達に至らないからだろう。これらをイメージ図化すると図(表)－2のとおり。自己実現欲求レベルとは、同図においては「可能性としての人間智至高レベル」をいう、人間智至高レベルとは平易に言えば「最高級の立派な人間」のことである。脳は今生きているこの時点は、死ぬまでの通過点である、死去の時（死去直前の時）に達するであろう可能性としての人間智至高レベル手前の一過性なのだと本能が判定するからだろう。言い換えると、当面の目標点であった地点に到達すると、一つの区切り・結末・終点は次のスタート基点（始点）に昇華するのだろう、すなわち、人間に備わる向上心の表れだろうと思う。



三つ目；超高齢社会にあって、行政・コミュニティあげて大なり小なりの社会福祉事業を推進している。わが山形市においても同市社会福祉協議会が主導し、各町内会に「いきいきサロン」の組織がある。以前の男性女性の参加者比率はザックリ男3割、女7割程度であったが、年々男の出席率が下がり、特にコロナ禍明けはほぼ女だけになった。男の参加が少ないのはどこの地域も同様であろうが、なぜなのか？答えは簡単、男にとっては活動内容がマンネリ化故の魅力がないからである。私は生物学的な男女差異（性差）を論ずるほどの知識は無いので客観的見解は言えないが、前記＊1・2・3の事態に大きな理由が隠されていると思う。

男は老計・死計の段、つまり、死を意識するようになると、さらなる知的刺激を求めて思索的になるのではないのか、逝くまで知的好奇心が旺盛なのではないか。最近の生成AIに質問して見たが、もちろん、男は論理的思考に強く、女は情緒的思考に強いなどと一律に言えないという回答でありそのとおりなのかもしれないが、……。

四つ目；<sup>しょうけい</sup>不断の憧憬（どうけい／あこがれ）追求の日々にしたい。前出安岡先生は、“理想も無限でなければならない、理想の無いところに進歩はない、理想－実現－現実という始めもなく終りも無く連続して貫くものが生活である。”と天（理想）地（実現）人（現実）三才の一貫を説かれる。

先生の書物を読むと、随所に高貴な、時に勇敢な人物の真骨頂を生き生きと書いて・描いておられる。先生ご自身が命を懸けて理想追求の人生を歩まれたことがそのまま伝わって来る。私は55歳を過ぎ還暦60歳間近かになったら突然というくらい歴史に関心・興味が湧いて、退職翌年の2010(平成22)年に地元

の歴史の会に入った、歴史に触れる意義は温故知新や不易流行の妙、人生の有り方と結び付く学びにあると思うが、思っていたが、会員は知識の自慢競争でつまらなかった、楽しくなかった、8年近く在籍し、2018(平成30)年春に退会した。

ところで、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅の間に体得した概念とされる「不易流行」の解釈についてだが、一般的には“変わらないものと変わっていくもの”を峻別する態度とされるが、私はそれも含むが“変えてはならないものと変えなければならないもの”を混同してはならない、それを社会通念に照らして峻別する眼力を修養する必要があると解釈している。

五つ目；山形新聞読者欄図(表)－3を読んで“そうだろう”と全くに納得した。“日々看護をしていて、この説は大いに的を射ていると思う”とある。私の思いと重なる。もっと有体に言うと、介護施設に入所している人、介護度を認定されている人をばかにしてはいけないということ。

お年寄りまとう神秘性

■新庄市 大友絹子 82歳

2024(26) 8/8(木) 山形新聞

私は介護施設に勤務している。毎日お年寄りたちのお世話をしている。高齢者は、一口では言い表せない神秘性をまとうていると考えている。

高齢者は身体の機能が鈍くなっていると一般に思われているようであり、私もそう思っていた。しかし、それは大いなる誤解である。と、ある作家の方が指摘していた。感性も鈍化するものではなく、意思と身体の運動性との乖離が大きくなり、他人に何か告げることにも億劫になる。一方、想像力、空想力、思い入れなどは活発になる。これが老齢の大きな特徴である。

日々看護をしていて、この説は大いに的を射ていると思う。

確かに彼(彼女)らは観察力が鋭く、想像力を働かせて看護者に質問したり、欠点をズバリと指摘したりしてドキッとさせられる一瞬も多々ある。

そして、看護者の境遇もよく覚えていて帰り道を案じてくれることもある。何も鈍っていない。鈍いと思うのは、その方の話をゆっくり時間をかけて聞いていないからにほかならない。

彼(彼女)らの感性は研ぎ澄まされているのだ。ゆっくり話してみよう、触れながらゆっくりと。老齢者の別の違った面が見えてくるはず。世代をつないでくれた方々の輝きが見えてくるはず。

それにしても触れながらゆっくり、ゆっくり話し合う時間が欲しい。人手が欲しい。老齢者の輝きを発見するために。

図(表)－3

六つ目；江戸時代後期の儒学者佐藤一斎の「言志録」に、図(表)－4のとおり有名な句がある。生涯学習の大切さを説いている。

|                                                             |                                                                                          |
|-------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 少にして学べば、即ち壮にして為すことあり<br>壮にして学べば、即ち老いて衰えず<br>老いて学べば、即ち死して朽ちず | 少年時に学べば壮年になって何かを為すことが出来、<br>壮年時に学んでおけば老年になっても気力は衰えない。<br>老いても学んでおれば社会に役立ち、その功績は刻まれ残って行く。 |
| 図(表)－4                                                      |                                                                                          |

私には何も残すものはないが、ここで私のことは棚に上げて愚痴。定年退職後、地域コミュニティに雑多に係る中で、様々な「何とか長」(ほとんどが高学歴者)を冠した人を見て来たが、口先では立派なことを垂れるが言うこととやることが一致しない、口を開いた言のとおりの実現が伴っていない、佐藤一斎のような心にストンと落ちて来る名文句を吐いてみろと言いたくなる。

3(onuma kaoru)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私は「生涯一筋〇〇する」人と老朽・偏屈・硬直は紙一重とみている。過去の成功・栄光はその時は輝いたのだ、生涯何かを貫くということ自体は立派であるが、そこに現状維持の臭いがしたら即座に軽蔑、心・言・行に造化の躍動性、創造性が漲っていれば拍手喝采となる。過去の成功・栄光にしがみ付く<sup>てい</sup>体は全くに魅力が湧かない。過去の成功・栄光から今この瞬間の生き方に何を活かしているかが問題である、今のここに輝きがなかったらそれは単なる過去の自慢話であると<sup>けいせい</sup>警醒自戒している。

戻って、冒頭の＊１・２・３に通底する吾が父親のこと、2006(H18)年８月24日(木)78歳の時、山形市立「済生館」病院で10日間の療養を経て死亡したが、父は農家ではあったものの政治経済のことが大好きで、10日間毎日顔出しに行き、枕もとで大いに丁々発止の議論をした、今更昔話・思い出話でもすればいいのにと考えたが、父はそんな回顧よりも現時の社会問題に強い関心を寄せていた。18時52分に息を引き取ったが、痴ほう症一片の兆しもなく、その日の午前中まで議論した。このように命を全うした父に対し最大限の賛辞と尊敬の念を抱き続けている。

閑話休題。福井県永平寺にあるとされる「道元禅師からのメッセージ」（冊子）から取り上げる。  
「人生に定年はない」（なお、依って立つ原文は無いとのこと。）  
人生に定年はありません  
老後も余生もないのです  
死を迎えるその一瞬までは人生の現役です  
人生の現役とは自らの人生を悔いなく生き切る人のことです  
そこには「老い」や「死」への恐れはなく  
「尊く美しい老い」と「安らかな死」があるばかりです。

私にはサミエル・ウルマン（アメリカの実業家・詩人）の詩〔 青春 〕が繋がって浮かぶ。そして、私は所々に記述するが、“最後は満足・満足・大満足！ 成功・成功・大成功！と心静かに唱え、息をこの世に置いてあの世に逝きたいと念じている。”に通じる。

世の70歳も超えた御仁を見るに付け、表向きは・建前は、功利に対する仁義を、邪悪に対する善良を説きながら、その内実は、我見我執・私利邪見に塗れて何食わぬ顔で評論家振る『ねいじん／いかさま』が散見する。私はそういう者とは絶縁することになっている、二度と近付かないことにしている。

(end)